『就実論叢』第48号　抜刷
就実大学・就実短期大学　2019年２月28日　発行

漫画『新世紀エヴァンゲリオン』からみる思春期のこころ

－情緒的ひきこもり状態を呈する思春期男子の精神分析的一考察－

Understanding of Psychodynamics in Adolescence through Cartoon of "Neon Genesis EVANGELION" : A psychoanalytical study of a youth showing emotional withdrawal

林　　秀　樹
西　野　将　史
藤　森　旭　人

就実論叢　第48号（2018），pp.139-151

漫画『新世紀エヴァンゲリオン』からみる思春期のこころ

－情緒的ひきこもり状態を呈する思春期男子の精神分析的一考察－

Understanding of Psychodynamics in Adolescence through Cartoon of "Neon Genesis EVANGELION"：A psychoanalytical study of a youth showing emotional withdrawal

林　　秀　樹（教育心理学科）
HAYASHI Hideki
西　野　将　史（岡山市障害者更生相談所）
NISHINO Masafumi
藤　森　旭　人（川崎医療福祉大学）
FUJIMORI Akihito

キーワード：思春期のこころ，病理的組織化，エディプス・コンプレックス，
妄想－分裂ポジション

１．はじめに

思春期は「疾風怒濤の時代（Hall, 1904）」である。身体的には第二次性徴期に入り，女性は初潮，男性は精通を経験しながら大人としての機能が備わり始める。その一方で，精神的には「心理的離乳（Hollingworth, 1928）」や「第二の分離－個体化（Blos, 1967）」が課題となり，精神的な親離れに伴ってこれまで抱えてきた心理的問題が再燃しやすい。人は誰もが思春期を経験するが，その情緒的揺れ動きの激しさには個人差があり，また，養育環境の影響を色濃く受けるため，思春期に突入した子どものこころを理解することは，極めて困難である。

そこで本論文では，思春期のこころの発達を理解することを目的とし，その手掛かりとして漫画『新世紀エヴァンゲリオン（貞本, 1995-2014）』を取り上げたい。さらに，思春期のこころを理解する視点として精神分析を取り上げ，この物語を主人公シンジの夢とみなすことで，対象喪失や強い孤独感によって情緒的ひきこもり状態となった思春期男子の理解を深める。なお，シンジのこころの状態に関する精神分析的考察はこれまでいくつかなされているため（例えば，西村，2004；溝部，2011），本論文では先行研究の視点を整理し，さらに「病理的組織化（Steiner, 1993）」という観点から考察を行う。最後に，情緒的ひきこもり状態を呈する思春期の心理療法について，若干の考察を加える。

２．こころの発達と病理的組織化

シンジの物語から思春期のこころの発達を理解するために，まず思春期の発達課題を簡単に振り返る。次に，これまで精神分析によって明らかにされてきたこころの発達に関する理論「エディプス・コンプレックス（Freud, 1905）」および「ポジション論（Klein, 1946）」を概説し，思春期との関連を整理する。最後に，こころの発達が停滞した状態とされる「病理的組織化（Steiner, 1993）」を説明する。

２-１．思春期の発達課題

Erikson（1959）や Erikson & Erikson（1998）は人生を８段階に区分し，それぞれの段階において固有の心理社会的危機の克服が求められるとする発達モデルを提唱した。このモデルでは，各段階において顕著となる危機を乗り越え，自我に統合していくことが，精神的に健康な人生を歩むために必要と考えられている。この中でも，思春期の発達課題は「アイデンティティの獲得 対 アイデンティティの混乱・拡散」である。ここでは，「自分はなにものであり，これからどういう役割と目標に向かって歩いていこうとするのか」など，自分自身の生き方について考えることが課題とされる。この発達課題が達成されないと，他者との関わり合いが持てずに孤立し，内的な虚無感に陥ると考えられている。

２-２．エディプス・コンプレックスと思春期

Freud は年齢に応じて精神的エネルギーが身体の特定の部分に集中し，加齢とともに移動していくとする精神―性的発達段階を考案した。そして，おおむね３歳から６歳までの時期を「エディプス期」と呼び，この時期の子どもは「エディプス・コンプレックス（Freud, 1905）」という課題に向き合い，克服する必要があると考えた。これは，Freud 自身の自己分析や子どもの間接的な分析を通して立ち上げられた理解であり，神話「エディプス王」にちなんだ理論である。

Freud（1905）によると，この時期の男児は母親を異性として意識し始め，独占したいと思い始める。そして，父親を競争相手とみなして嫉妬心や憎しみを抱き，排除しようとする空想を抱く。しかし，男児にとって父親はとても大きな存在であるため，自分が敵意を持っていることに罪悪感を抱き，父親に去勢されるのではないかと恐れ始める（去勢不安）。この去勢不安によって，母親を独占したい気持ちを放棄することになり，次の発達段階に進むことができる。

しかし，人がエディプス・コンプレックスから完全に自由になることは難しい。特に思春期は，第二次性徴に伴う「性」への目覚めや身体の急速な発達により，エディプス・コンプレックスが再燃しやすい時期とされる（橋本, 1985）。そのため，母親を独占したい欲求は思春期にも認められることがあり，その独占欲は異性との関係においても立ち現われてくる。

その後，エディプス・コンプレックスの理解は Bion（1963）によって発展させられた。その中で彼は，エディプス神話における真実の探求とそれによる災いに注目している。例えば，神話の中でエディプスは父ライオスを殺し，その妻イオカステを娶ることになる。しか

し，イオカステはエディプスの実母であり，そのことを知ったイオカステは自殺し，エディプスは自らの目を突き刺し盲目となる。このように現代の理解では，エディプス・コンプレックスには，母親を独占したい欲求の放棄のみならず，真実を知ることの苦悩に関する課題も含意されている。

2-3．ポジション論と思春期

Klein は Freud の知見を発展させ，乳児期のこころの発達に関する「ポジション論（Klein, 1946）」を展開した。

Klein（1946）によると，人は「妄想－分裂ポジション」が優勢な状態から，「抑うつポジション」が優勢な状態に発達していくと考えられている。生後間もなく始まる妄想－分裂ポジションでは，乳児は苦痛を抱えることができず，分裂などの「原始的防衛機制（Klein, 1957）」によって不快感情を自身から切り離し，対象（主に母親）に投げ入れることで対処しようとする。この時，乳児は応答してくれる対象を良い対象，応答してくれない対象を悪い対象とみなし，これらの対象が別々に存在していると感じる。さらに，乳児の感覚は未分化であるため，空腹などの苦痛は「言いようのない恐怖（nameless dread）（Bion, 1967）」として体験される。そして，対象の応答がある場合は意味づけられた心地良いものとして経験されるが，対象の応答がない場合は悪い対象が立ち現われたと感じられ，その恐怖が返ってくることで不安感を抱き（迫害不安），時にその圧倒的な恐怖によって，自分がバラバラになって無くなってしまうような強い不安（破滅－解体不安）を感じる。その後，生後６カ月ごろから始まる抑うつポジションでは，徐々に対象を全体として捉えることができるようになる。そのため，応答してくれた良い対象も応答してくれなかった悪い対象も，同じ対象であることを知る。すると乳児は，これまで悪い対象だと思って一方的に苦痛を投げ入れていたことへの罪悪感（抑うつ不安）を抱き，苦痛や不快感情を抱えられるようになっていく。このような対象とのやり取りを通して，乳児のこころは発達していくと考えられている。

その後，このポジション論は Bion（1963）によって発展し，妄想－分裂ポジションと抑うつポジションへの発達は一方通行ではなく，人生を通じて両ポジションを行き来することが明示された。この見解は近年も支持されており，Britton（1998）は，人のこころは妄想－分裂ポジションと抑うつポジションを行き来しながら螺旋的に発達していくものと考えている。ただし，思春期は第二次性徴や第二の分離－個体化に伴い，情緒的な揺れ動きが激しい時期である。そのため，抑うつポジションへの移行が十分になされず，妄想－分裂ポジションが優勢な状態に陥ってしまうことも少なくない。

2-4．病理的組織化と思春期

上述したように，人は妄想－分裂ポジションと抑うつポジションを行き来しながら発達すると考えられている。しかし，どちらのポジションに身を置いても強い不安を経験することになるため，それらの不安を感じないように，いずれのポジションにも留まろうとしない病理的な状態がある。それが「病理的組織化（Steiner, 1993）」である。

Steiner（1993）は，個人の中に複数のパーソナリティが併存することを前提とし，それぞれが独立したパーソナリティのように活動しながら複雑に組織化された防衛を築く「病理的組織化」と呼ばれるこころの状態を見つけ出した。この発見には，Rosenfeld（1964）の自己愛に関する知見が影響を与えている。彼は，他者に依存することが極度に難しい病理的な自己愛として,「破壊的自己愛」を想定した。これは，良い対象を求めようとする依存的なパーソナリティがこころの中に現れたとき，その依存的なパーソナリティを弱くて価値のないものと見なして破壊しようとするパーソナリティがこころの中に立ち現われてくるこころの状態である。このような組織化が形成されると,自動的にこの構造が作動してしまうため,外界にある良い対象を内在化するどころか，良い対象に触れ合うことすら困難となり，結果として他者との情緒的接触を避けるようになるとされる。

さらに病理的な組織化が形成された状態では，各ポジションで生じる不安を回避するための保護的な避難所（心的退避所）が，こころの中に存在するという。それは，一見すると温かそうであるが，実は他者との交流が妨げられているため，こころの成長にとっては不毛な場所とされる。そして，何らかのきっかけによって病理的組織化を放棄し，心的退避所から外に出ると，彼らは劣等感を抱き，軽蔑の眼差しでみられているという幻想に関連する「恥」を経験すると考えられている（Steiner, 2011）。

先に述べたように，思春期では「アイデンティティの獲得 対 アイデンティティの混乱・拡散」に向き合わなければならない。そこでは，自分の役割や目標の決定に伴い，自身の能力の限界を認識することが必要となる。そのため，アイデンティティの混乱あるいは拡散が生じると，強い抑うつ感や空虚感，孤立感が生じ（Erikson & Erikson, 1998），ひきこもりと同様の状態に陥ると考えられている（小此木, 2000）。一方，上述したように，病理的な組織化が形成されると他者との情緒的接触を回避するため,ひきこもり状態を示すことがある。したがって，思春期に認められるひきこもりが，アイデンティティの混乱や拡散に由来するひきこもりなのか，あるいは病理的組織化に由来するひきこもりなのかを区別することは難しいと考えられる。

3．漫画『新世紀エヴァンゲリオン』のあらすじ

上述の理論を具体的に検討するために，漫画『新世紀エヴァンゲリオン』を取り上げる。以下に，この物語のあらすじを記す。

時は西暦2015年。15年前に起きた南極大陸における大爆破（セカンド・インパクト）により地軸は傾き,常夏の国になってしまった日本。かつて箱根と呼ばれた地は「第三新東京市」とよばれ，日本の拠点となっていた。その地に「使徒」と呼ばれる正体不明の怪物が現れるところから物語は始まる。主人公の碇シンジ（14歳）は，父親であり国連特務機関ネルフの最高司令長官でもある碇ゲンドウ（48歳）に呼び寄せられ，巨大人型兵器「エヴァンゲリオン（以下, EVA）」に乗るよう命令される。シンジは突然のことに驚き,父親の要求を拒むが,

戦術作戦部の葛城ミサト（29歳）から追い打ちをかけるように搭乗を命令され，EVA に乗る。

主人公シンジは幼少期に EVA の実験によって母親を失い（彼はこのことを全く覚えていない），その後，叔父のもとに預けられた。シンジは父親に捨てられたと感じ，一向に迎えに現れない父親に失望している。さらに，シンジは叔父家族から完全に疎まれていたようで，中学に入るころには庭にシンジのためと称した小さな勉強部屋が建てられる。シンジは叔父家族との生活について，「表面上は素直でよい子を装っていた」と振り返っている。重要他者の喪失やその後の養育環境の影響もあってか，シンジは人に対してこころを開こうとせず，友人ともかかわろうとしなかった。ネルフにやってきてからも他者にこころを開かず，こころに傷を負うようなできごとに遭遇するとすぐに叔父家族のもとに帰ろうとしたり，自室にひきこもったりする。

シンジはネルフにやってきて，父親との同居ではなく，一人暮らしを選択する。第３使徒との戦闘で心身ともに疲れ切っているシンジを見かね，葛城は自分との同居を半強制的に決める。葛城の自宅に向かう道中，シンジは葛城に励まされて涙を流し，そして，葛城と生活を共にする中で，家族の温もりを感じ始める。一方，中学校では鈴原トウジ（14歳）や相田ケンスケ（14歳）に出会い，EVA のパイロットであることで一躍人気者となる。そのような中，第４使徒が襲来する。シンジは辛うじて勝利を収めるものの，命令に背いたことを葛城に咎められ，数日間，家出する。叔父家族のもとへ向かう電車に乗ろうとしたところで葛城が迎えに来て，シンジは涙を流しながら葛城との生活に戻る決意をする。

EVA は選ばれた子ども（適格者）しか操縦できず，シンジの他にパイロットは二人いる。一人は綾波レイ（14歳）である。レイはシンジの父ゲンドウのことを慕っているようで，「私が信じているのはこの世で碇司令だけ」という。一方のゲンドウは自らを犠牲にしながらもレイを助けたり，彼女の前では優し気な表情を浮かべている。二人は互いに特別な思い入れを抱いているようで，シンジは二人の親密な関係を知り，動揺する。

もう一人の適格者は惣流・アスカ・ラングレー（14歳）である。アスカはドイツで育ち，飛び級で大学に合格するほどの秀才で，嫉妬心が強い。そんなアスカだが，自ら葛城やシンジとの同居を選ぶ。同じころ葛城は昇進し，自宅にトウジやケンスケらが集まり，祝賀会を開くこととなる。シンジはこのような大人数で集まった経験がなく，こころの底から楽しい時間を過ごしていた。人との情緒的な繋がりを感じたためか，翌日シンジは父ゲンドウに電話をかける。しかし，ゲンドウから「人は皆，自分ひとりの力で生き，自分ひとりの力で成長していくものだ」「人と人とが完全に理解しあうことは決してできぬ」と一方的に言われ，シンジは落ち込む。その中，クラスメイトのトウジが EVA の４人目の適格者として選ばれる。彼はシンジと第３使徒との戦いの中で妹が重傷を負ったため，シンジをかなり恨んでいた。シンジもはじめ，トウジに対してこころを閉ざしていたが，第４使徒との戦闘中にトウジらを助けたこともあり，次第に仲良くなり，今では親友となっていた。しかし，不幸にもトウジが乗った EVA は第８使徒に乗っ取られてしまう。シンジはトウジが乗った EVA と戦う

ことを拒むが，父親の命令によって自分の意志とは関係なくトウジを殺めることとなる。これを受けてシンジは再びこころを閉ざし，ネルフを去る決意を固める。

叔父家族のもとに戻ろうとするシンジに，加持リョウジが近寄ってくる。加持は「君には真実を知る権利と義務がある」といい，世界のシナリオが記してある死海文書の存在，世界を裏で動かしている権力者ゼーレの存在，ネルフの地下に捕らわれている「アダム（第１使徒）」の存在，母親と EVA の関係や母親の死の真相を語り，「真実から目を背けてはいけない」とシンジに伝える。シンジは「重すぎて僕には背負えない」と絶望しながらも，彼との出会いをきっかけに真実に目を向け，自分の役割について考え始める。

シンジを取り戻しに来た加持は，自身や葛城の生育歴を語りながらシンジに EVA に搭乗するよう諭す。シンジは意を決して EVA に搭乗するが，EVA が覚醒してしまい，EVA の中に取り込まれてしまう。異空間の中でシンジは，母ユイに出会い，母親のやさしさに触れる。そして，父ゲンドウへの積年の恨みを思い出し，彼を刺し殺す。最後に「自分の進む道はあなたが自分で決めるのよ」とユイに促されたことで，元の世界に戻る。（後にわかることだが，ユイの魂は EVA に取り込まれており，肉体はレイとして生まれ変わっている。）この一件からシンジはレイへの思いを強くし，レイとの関係がさらに深まる。しかし，再び不幸にも第11使徒が襲来する。レイは使徒に侵食され，シンジを守るために自爆する。

レイを失い，失意のどん底にあったシンジに，５人目の適格者，渚カヲルが近寄ってくる。シンジはカヲルの家に入り浸ってひきこもりながら，カヲルに心情を吐露する。その中，レイが生きていることを知らされる。しかし，それは３人目のレイであり，技術開発部の赤木リツコによってレイのスペアが複数いること，レイはシンジの母ユイの肉体から作られていることを知らされ，シンジは再び苦悩する。さらに追い打ちをかけるように，ケンスケをはじめとするクラスメイトが第三新東京市を離れてしまう。シンジは途方に暮れ，一人嘆いていると，カヲルが近寄ってきて支えようとする。しかし，シンジは「こんなことなら最初から誰とも出会わなければよかった。前みたいに一人のままでよかったんだ」と大切な人を失う苦しみを恐れ，カヲルと友達にはならないという。

シンジがカヲルの優しさを微かに感じ始めたころ，カヲルはゼーレの指示を受け，サード・インパクトを引き起こそうとする。シンジはカヲルが使徒であることを知り，再び強い葛藤を抱きながらも，彼をやむなく殺す。シンジは再び落ち込み，自らの役割について疑問を抱き始め，葛城に対してもこころを閉ざす。ほどなく，ゼーレによってネルフの占拠が行われる。意気消沈し，今にも殺されそうなシンジを葛城が助け，葛城は自分が知っているすべての情報をシンジに伝える。あまりの情報量でうろたえるシンジに，葛城は「自分の意志で一歩を踏み出しなさい」「あなた自身これからどうしたいのか」「誰の力も借りずに，答えを探しなさい」といい，最後の力を振り絞って EVA に乗ることを命令する。シンジは意を決して搭乗するが，ゼーレがよこした新たな EVA シリーズがシンジに襲い掛かり，サード・インパクトが引き起こる。シンジは母親の喪失や母親との温かいかかわりの感覚，孤独な生活，

父親との確執など，自らの過去と向き合いながら，ゼーレの思惑，ゲンドウの野望に翻弄されながらも，葛藤に満ち溢れた世界に留まることを決める。

これまでの夏模様とは打って変わって，辺りは雪景色になる。シンジは高校受験のために電車に乗ろうとしており，友人に温かく見送られ，嬉しそうな表情を浮かべている。受験校の最寄り駅に到着すると，アスカやケンスケに出会う。しかし，彼女たちはシンジのことを覚えておらず，一方のシンジも，彼女たちのことを覚えていない。この出会いを不思議に思いながらも，シンジは「頑張ろう」と自分に言い聞かせ，「自分の歩く道は自分の足で探す」ことを誓い，物語は幕を閉じる。

４．シンジの物語からみる思春期のこころ

漫画『新世紀エヴァンゲリオン』から思春期のこころを理解するにあたり，この物語をシンジの夢として捉えることができる理由と，精神分析における夢の位置づけ，および解釈の視点について説明する。

物語終盤の章，サード・インパクトによってシンジとレイは融合する。その中で，レイが「もとの世界に戻るのね」とシンジに問い，シンジが葛藤に満ち溢れた世界に留まる覚悟を決めたところで，この章は幕を閉じる。そして，最終章に入ると辺りはすっかり冬景色となり，シンジはアスカやケンスケと出会うがお互い覚えていない。このことから，ネルフで起きた一連の出来事は，今の世界とは全く別のところで起きた出来事であり，シンジの夢である可能性がうかがえる（実際に，アニメ版のエヴァンゲリオンは明らかに夢オチで終わっている。）

Freud（1900）は「夢は無意識への王道である」と記し，夢の内容を解釈することで人の無意識に接近できると考えた。さらに，後に Klein は夢が人の内的世界を描写していることを示唆している。また，精神分析では，人のこころの中にはいくつかのパーソナリティの部分が存在し，それらが複雑に絡み合うことで個人が形成されていると考えられている。例えば，Bion（1967）はパーソナリティを精神病部分と非精神病部分に，Meltzer（1968）は他者との現実的な関りを経験できる部分と自己破壊的態度へと誘う部分に区分し，患者のこころの状態を理解している。したがって，本論文ではこの物語を夢と捉えて内容を理解するだけでなく，この物語に現れる登場人物をシンジのこころのパーソナリティの一部である，との視点を踏まえながら考察する。

４-１．エディプス・コンプレックスと思春期の課題から

この物語では，葛藤に満ちた三者関係が随所に認められる。例えば，シンジ－レイ－アスカの三者関係が挙げられる。シンジはレイやアスカに対して好意を抱く時期があり，一方のアスカはレイの能力や性格に羨望を向け，他方のレイは傷ついたアスカを気遣うシンジを見て嫉妬心を抱いている。また，赤木－ゲンドウ－レイの三者関係も興味深い。赤木はゲンドウの愛人で彼に思いを寄せる一方，ゲンドウは赤木にそれほど関心がない様子である。そし

て，赤木はレイにゲンドウの妻ユイの姿を重ねて，嫉妬心からレイを絞め殺そうとする。他にも，葛城－加持－アスカの三者関係も挙げられる。葛城と加持は大学時代に付き合っており，今でも互いに好意を抱いている。その一方，加持に恋心を抱くアスカは二人の関係を疎ましく思っている。このようにいくつも認められる三者関係の中でも，特にシンジ－レイ－ゲンドウの関係は色濃く，この物語で欠かせないものである。

物語を振り返ると，レイは「私が信じているのはこの世で碇司令だけ」といったり，ゲンドウの眼鏡を大切そうに保管しており，ゲンドウのことをかなり慕っている様子である。一方のゲンドウは，自らを犠牲にしながらもレイを助けたり，彼女の前では優し気な表情を浮かべている。そして，シンジは二人の親密な関係に疑問を抱きながらも，レイへの思いを強くしていく。レイがシンジの母ユイの肉体からできていることを鑑みると，この三者関係はまさにエディプス状況といえる。実際に EVA に取り込まれた際，シンジは母親の温かさに触れ，父親を刺し殺している。

加えて，先に述べたように，Bion（1963）はエディプス・コンプレックスのもう一つの側面として，真実を知ることの過酷さを取り上げている。物語を振り返ると，加持は「真実を知る必要がある」とシンジにいい，死海文書の存在，ゼーレの存在，母親の死の真相などを伝えている。特に母親の事故死について，シンジはすっかり覚えていないようである。これは，まさに防衛機制の「抑圧（Freud & Breuer, 1895）」が働いている状態である。抑圧は耐えられないできごとを無意識の領域に抑え込む防衛であることから，母親との死別がシンジにとって非常に外傷的な体験であったことがうかがえる。さらに物語が進むと，レイが母ユイの肉体によって作られていること，レイには多くのスペアが存在すること，一時頼りにしていたカヲルが実は使徒であったことなど，シンジは過酷な真実に向き合うこととなる。

以上のことから，この物語では三者関係における葛藤のみならず，真実を知ることの苦悩が至る所で認められる。したがって，片岡（2015）や溝部（2011）が指摘しているように，シンジは思春期に入ってからエディプス・コンプレックスの課題に向き合い始めたものと推察される。橋本（1985）によると，思春期はエディプス・コンプレックスが再燃しやすい時期である。この物語からも示唆されるように，思春期におけるエディプス葛藤は，両親との三者関係のみならず，同世代との恋愛関係においても現れやすいと考えられる。

また，14歳というシンジの年齢から，彼が思春期の課題にも取り組んでいた可能性がある。上述したように，思春期の課題は「アイデンティティの獲得 対 アイデンティティの混乱・拡散」であり，役割や目標など，自分自身の生き方について考えることが課題とされている（Erikson & Erikson, 1998）。実際に，シンジは加持に促されながら真実と向き合い，母ユイや葛城に後押しされながら自らの役割について考え，元の世界に留まる決意をしている。したがって，溝部（2011）が示唆しているように，シンジはエディプス・コンプレックスに向き合いながら，思春期の課題にも取り組んでいたと考えられる。

4-2．妄想－分裂ポジションと病理的組織化から

シンジは幼いころ，EVA の事故によって母親を失っている。幼いころの喪失体験が子どものこころに外傷的な影響を与えることは，想像に難くない。実際に，シンジは母親の死を抑圧していた。Freud（1917）によると，対象喪失には「喪の作業」が必要とされる。さらに松木（2007）は，この作業には喪失にまつわる痛みを抱えてくれる他者の存在（環境）が重要になると考えている。

シンジの生育歴を振り返ると，彼は母親の死後，叔父のもとに預けられている。「表面上は素直でよい子を装っていた」とのシンジの語りから，叔父家族が喪の作業に伴う痛みを抱えてくれる環境であったとは言い難い。加えて，父ゲンドウは大変厳しい人間であり，先に述べたように未解決なエディプス葛藤が想定されることから，シンジが去勢不安のような恐怖心を抱いていた可能性がある。よって，母親の喪失にまつわる苦痛を共有できるような父子関係ではなかったと思われる。さらに，シンジの行動様式を振り返ると，彼はものごとがうまく進まなくて抑うつ的になるものの，基本的には葛藤を抱えることが難しく，他罰的になって回避してしまう傾向がある。これらのことから，シンジのこころの発達は十分になされておらず，妄想－分裂ポジションが優勢な状態であると考えられる。この理解は，溝部（2017）からも支持される。

シンジのこころの状態が妄想－分裂ポジション優勢な状態である，との見立てから物語を振り返ると，幾度も襲来する使徒は「悪い対象」として理解できる。現に，その不気味な風貌から，使徒はまさに「名付けようのない恐怖（Bion, 1967）」である。さらに使徒は圧倒的な力を有しており, EVA は何度も破壊されている。人の発達が「解体－全滅不安」から「迫害不安」,「抑うつ不安」へと変遷する（松木, 1996）ことを鑑みると，シンジが抱いている不安の水準は「解体－全滅不安」の可能性があり，かなり危ういこころの状態ともいえる。

さらに，使徒をシンジのこころの中の悪い対象としてとらえ，それらがシンジを襲うタイミングとその影響を振り返ると，興味深いことが浮かび上がる。例えば，第 4 使徒は，シンジが葛城の家に転がり込み，家族の温かさなどの情緒的繋がりを感じたときに襲来し，シンジと葛城の関係を一時悪化させている。さらに第 8 使徒は，出会った当初不仲であったトウジとシンジが次第に仲良くなり，シンジが同世代の同性との情緒的繋がりを感じていたころに襲来し，その関係を破壊している。他にも，第11使徒は，最初は心理的距離が離れていたレイとシンジがかなり接近し，シンジが同世代の異性との情緒的繋がりの萌芽を感じ始めたころに襲来し，その関係を破壊している。

物語の登場人物をシンジのパーソナリティの一部と考えると，情緒的絆を感じるパーソナリティが動き始めたとき，その関係を破壊しようとするパーソナリティが活動している，と理解できる。これは上述した「病理的組織化（Steiner, 1993）」の病理である。また，Rosenfeld（1964）によると，病理的に組織化された状態では，悪い対象が理想化されることがあると考えられている。実際に，シンジはカヲル（使徒）に急接近する時期があり，一

方的に心情を吐露したり一時とても頼りにしていたことから，悪い対象（使徒）が理想化されているところも垣間見える。

さらに，Steiner（1993）によると，病理的な組織化を形成している人には，こころの中に退避所があるとされる。そして，その退避所はこころの成長を伴わない不毛な場所と考えられている。物語を振り返ると，シンジは自らのこころが傷つくようなできごとに触れるとすぐに挫折し，叔父家族のもとに帰ろうとしている。シンジにとっての退避所は，叔父家族だったのかもしれない。しかし，叔父家族のところは心理的温かさを感じられるような場所ではなく，こころの成長は生じ得ない。したがって，この視点からも，シンジが病理的な組織化を形成している状態であることが支持される。

ただし，思春期のパーソナリティは発達途上であるため，病理的な組織化が十分に形成されないことも予想される。実際に，使徒（悪い対象）はシンジと他者の情緒的繋がりを抜け目なく完全に破壊しているわけではない。また，病理的組織化はそもそも妄想－分裂ポジションと抑うつポジションによる不安を感じないための防衛であるため，病理的な組織化を形成した人は変化を好まないと考えられている（Steiner, 2011）。物語の冒頭，シンジが叔父家族という心的退避所から脱却し，ネルフという新たな地に足を踏み入れたことを鑑みると，シンジは今まさに，病理的な組織化が形成された状態を打開しようと動き始めたところなのかもしれない。

Steiner（2011）によると，病理的な組織化を形成した人が心的退避所から抜け出したとき，圧倒的な劣等感や無力感にさいなまれ，「恥」の気持ちを抱くとされる。実際にシンジは，使徒との戦いやアスカとの比較の中で自分の無力さを知り，強い劣等感を抱いていた。また，アスカと協同して使徒を倒す際，シンジは強い「恥」の感覚を抱くこともあった。

先に述べたように，情緒的ひきこもり状態を呈する思春期の理解において，そのひきこもりが病理的組織化に由来するのか，それともアイデンティティの拡散あるいは混乱に由来するのかを把握することは難しい。Rosenfeld（1964）によると，病理的組織化の背景として自己愛の傷つきが想定されている。さらに，Kohut（1984）は自己愛が傷つく一因として母子関係における外傷的な共感不全を挙げている。シンジの養育環境を振り返ると，彼は幼いころに母親を亡くし，その後，叔父家族のもとに預けられていることから，自己愛が傷つきやすい環境であった可能性がある。したがって，シンジの情緒的ひきこもり状態は，病理的組織化に由来するのかもしれない。

４－３．心理療法への示唆

以上のことから，漫画『新世紀エヴァンゲリオン』は，情緒的な引きこもり状態，すなわち病理的な組織化を形成している思春期男子が，自身の心的退避所から抜け出し，他者と情緒的に接触することや他者に依存することの難しさを感じながら，先送りしていた心理的課題であるエディプス・コンプレックスに向き合い，思春期の課題とされるアイデンティティの獲得に取り組む様を描いた物語といえる。以下に，心理療法における若干の示唆を記す。

これまで述べてきたように，情緒的ひきこもり状態を呈する思春期の理解において，その状態がアイデンティティの拡散・混乱に由来するのか，あるいは病理的組織化に由来するのかを把握することは難しい。そして，仮に病理的組織化に由来しているのであれば，この組織化が強固になると治療は困難を極めるため（Steiner, 2011），早期発見・早期治療が重要となる。病理的組織化の背景に自己愛の傷つきが想定され（Rosenfeld, 1964），その一因として母子関係が挙げられていることから（Kohut, 1984），家族関係の丁寧な聴取，およびそれらの情報に基づいたアセスメントがまず欠かせない。ただし，思春期のパーソナリティは発達途上であるため，シンジのように病理的な組織化が十分に形成されていない可能性もある。また，思春期はこれまで保留していた課題が再燃しやすい時期であるため，この物語で認められたように，エディプス・コンプレックスのようなより早期の課題に向き合う必要もでてくる。

以上より，情緒的ひきこもり状態を呈する思春期の心理療法において，心理臨床家はまず彼らの親子関係を精査し，次いで先送りしている心理的課題を検討しながら多角的なアセスメントを実施したうえで, 思春期の発達課題「アイデンティティの獲得 対 アイデンティティの混乱・拡散」に共に向き合う必要がある。このような取り組みは，寄る辺ない不安を抱える彼らの支えとなり，成人期に向かう新たな一歩，すなわち彼らの「新世紀」への旅立ちを後押しすることとなるだろう。

引用文献

Bion, W. (1963). *Elements of psycho-analysis*. London: Karnac Books. 福本修（訳）(1999). 精神分析の方法 I ――セブン・サーヴァンツ．精神分析の要素．法政大学出版局．pp. 117–212.

Bion, W. (1967). *Second thoughts: Selected papers on psycho-analysis*. London: Karnac Books. 松木邦裕（監訳）中川慎一郎（訳）．再考：精神病の精神分析論．金剛出版.

Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162–186.

Britton, R. (1998). *Belief and imagination: Explorations in psychoanalysis*. London: Routledge. 松木邦裕（監訳）古賀靖彦（訳）(2002). 信念と想像――精神分析のこころの探求．金剛出版 .

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. 西平直・中島由恵（訳）(2011). アイデンティティとライフサイクル．誠信書房.

Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (1998). The life cycle completed (extended version). New York: Norton. 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）(2001). ライフサイクル, その完結（増補版）. みすず書房.

Freud, S. (1900). The interpretation of dreams. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition*

of the complete psychological works of Sigmund Freud 4-5. London: Hogarth Press. 新宮一成（訳）（2007）．夢解釈．岩波書店

Freud, S. (1905). Three essays on the theory of sexuality. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud 7*. London: Hogarth Press. pp.130-243. 渡邉俊之（訳）（2009）．性理論のための三篇．新宮一成・鷲田清一・道籏泰三・高田珠樹・須藤訓任（編）．フロイト全集６．岩波書店．pp. 163-310.

Freud, S. (1917). Mourning and melancholia. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud 14*. London: Hogarth Press. pp. 141-158. 伊藤正博（訳）（2010）．喪とメランコリー．新宮一成・本間直樹（編）．フロイト全集 14．岩波書店．pp. 273-293.

Freud, S., & Breuer, J. (1895). Studies on Hysteria. In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud 2*. London: Hogarth Press. pp. 1-309. 芝伸太郎（編訳）（2008）．ヒステリー研究．フロイト全集２．岩波書店.

Hall, G. S. (1904). *Adolescence*. New York: D. Appleton. 元良勇次郎・中島力造・速水滉・青木宗太郎（訳）（1910）．青年期の研究．同文館 .

橋本雅雄（1985）．思春期中期の精神療法．小此木啓吾･岩崎徹也･橋本雅雄･皆川邦直（編）．精神分析セミナーⅤ――発達とライフサイクルの観点．岩崎学術出版社．pp. 177-204.

Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: D. Appleton.

片岡一竹（2015）．意味と享楽のあいだで：『新世紀エヴァンゲリオン』における精神分析．表象・メディア研究，**5**，99-123.

Klein, M. (1946). Notes on some schizoid mechanisms. *International Journal of Psycho-Analysis*, **27**, 99-110. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男（訳）（1985）．分裂機制についての覚書．小此木啓吾・岩崎徹也（編）．メラニー・クライン著作集４．誠信書房．pp. 3-32.

Klein, M. (1957). Envy and gratitude. In R. Money-Kyrle (Ed), *The Writings of Melanie Klein 3*. London: Tavistock. pp. 176-235. 松本善男（訳）（1996）．羨望と感謝．小此木啓吾・岩崎徹也（編）．メラニー・クライン著作集５．誠信書房．pp. 3-89.

Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* Chicago: University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉（監訳）（1995）．自己の治癒．みすず書房 .

松木邦弘（1996）．対象関係論を学ぶ．岩崎学術出版社 .

松木邦裕（2007）．「抑うつ」についての理論．松木邦裕・賀来博光（編）抑うつの精神分析的アプローチ――病理の理解と心理療法による援助の実際．金剛出版．pp. 15-49.

Meltzer, D. (1968). Terror, persecution, dread. *International Journal of Psycho-Analysis*,

49, 396-400. 世良洋（訳）(1993). 恐怖，迫害，恐れ――妄想性不安の解析．松木邦裕（監訳）．メラニー・クライン・トゥデイ②．岩崎学術出版社．pp. 97-106.

溝部宏二（2011）．新世紀エヴァンゲリオンにみる思春期課題と精神障害――14歳のカルテ．追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要，**8**，42-57.

溝部宏二（2017）．罪と贖罪の神話:「シン・ゴジラ」「風の谷のナウシカ」から考える「シン・エヴァンゲリオン劇場版：Ⅱ」．追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要，**14**, 35-56.

西村則昭（2004）．アニメと思春期のこころ．太洋社 .

小此木啓吾（2000）．ひきこもりの社会心理的背景．狩野力八郎・近藤有司（編）．青年のひきこもり――心理社会的背景・病理・治療的援助．岩崎学術出版社．pp. 13-26.

Rosenfeld, H. (1964). On the psychopathology of narcissism: A clinical approach. *International Journal of Psycho-Analysis*, **45**, 332-337.

貞本義行（1995-2014）．新世紀エヴァンゲリオン1-14巻．角川書店.

Steiner, J. (1993). *Psychic retreats: Pathological organizations in psychotic, neurotic and borderline patients*. London: Routledge. 衣笠隆幸（監訳）田宮聡・岡本百合・浅田護・矢野栄一・大月道世（訳）(1997)．こころの退避――精神病・神経症・境界例患者の病理的組織化．岩崎学術出版社.

Steiner, J. (2011). *Seeing and being seen: Emerging from a psychic retreat*. London: Routledge. 衣笠隆幸（監訳）浅田義孝（訳）．見ることと見られること――「こころの退避」から「恥」の精神分析へ．岩崎学術出版社.